

読書通信



No. 156

① 安倍首相が憲法改正でクセ球を投げたことに護憲派はどう対応すべきだろうか。戦力不保持や交戦権の否認を規定した9条2項を削除するという従来の主張は取り下げ、単に自衛隊を付記することで自衛隊を日陰の身から救い出そうというだけのことだと安倍首相に言われれば、反対はしにくい。であれば、改憲論議はすつかり自民党ベースになる可能性がある。

松竹伸幸『改憲的護憲論』(集英社新書、799円)は、改憲を認める形で自民党案に対峙しようとするユニークな憲法擁護論である。災害

んちんかんな会話がむしろ楽しくなってくる。

シナリオライターである著者の筆は冴えわたり、深刻な話がすつかりユーモア小説の趣に一変。自分にはこんな介護ができるだろうかと思つてしまった。書名と異なり、憎しみどころか愛情あふれる介護日記として多くを学ぶことができる。親子に限らない。夫婦の老老介護にも大いに参考になるはずである。

③ 世界最強を誇ったドイツ軍がなぜ第1次世界大戦で敗れ去ったのか。飯倉章『1918年最強ドイツ軍はなぜ敗れたのか』(文春新書、993円)は、ビスマルクやモルトケなど著名な政治家や軍人を登場させて、ドイツ軍が戦術と戦略面でいかに勝ちいかに敗れたのか、政治家と軍人の人間関係のもつれがどう勝敗の帰趨

救援と専守防衛の自衛隊という現実に立ち、護憲派は守勢一方から抜け出すべきだ、として、平和憲法の精神を尊重しながら現実に即していることとする著者の問題意識は斬新である。「共產党は憲法・防衛論の矛盾を克服できるか」と題する一章は流し読みしてしまったが、全体を通じて著者の危機感がひしひしと感じられた。

② 代わって少し柔らかい本を。といつてもテーマは重い。老老介護の実録本、阿井渉介『愛と憎しみ 奇跡の老老介護』(講談社、1620円)は、71歳の息子と100歳の母親の物語だ。痴呆が進む寝たきり母親の下の世話までする息子は、最初こそ腹立たしい壮絶な毎日明け暮れるが、ある日、心を入れ替え発想を変えての親孝行に転じてみると、風景が一変。親子のと

を分けたか、戦いの具体的展開を詳細に追い欧州戦線の一部始終が描かれる。戦史好きには絶好の書だが、そこまで詳しく知りたくないという人は、まえがき、序章、終章によってドイツの強みと脆さを知るのがいい。E.U.ドイツの独り勝ちを考える上でも大いに参考になる。

④ マッカーシズムはハリウッドに深い傷跡を残した。吉村英夫『ハリウッド「赤狩り」との闘い』(大月書店、1944円)の中心人物はC・チャップリンとW・ワイラーだが、特にワイラーが監督した「ローマの休日」を脚本と演出、そしてA・ヘップバーンを題材に、赤狩りに巻き込まれた映画人の思いと行動を探っていく。考えさせられるだけでなく、懐かしい名画や俳優たちが多数登場して楽しめる。(浅野 純次)